



Title	巻頭言：第20号の発刊に寄せて
Author(s)	小澤，伊久美
Citation	母語・継承語・バイリンガル教育（MHB）研究. 2024, 20
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/102039
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

巻頭言 第 20 号の発刊に寄せて

2023 年度は本学会の前身である MHB 研究会の発足から 20 周年を迎えました。研究会発足時から年に 1 回発刊してきた紀要『母語・継承語・バイリンガル教育 (MHB) 研究』の第 20 号をお届けできることを大変うれしく思います。

本誌には、一般投稿論文の他に、年次大会の基調講演や学会の活動録などを収録しております。母語・継承語・バイリンガル教育に関心のある読者の皆様にとって、本誌がさらなる教育活動・研究活動を進め、発展される上での刺激となることを願っております。

本学会の 2023 年度の年次大会は「公正な言語教育を求めて—バイリンガルろう教育を再考する」をテーマとして開催しましたが、今号には大会企画であったルース・スワンウィック博士、ダニエル・フォビ博士、リチャード・ドク氏による基調講演「ガーナにおけるろう児の早期ケア・教育」と、森壮也氏による特別講演「ろう者のセルフ・アドボカシー—手話にまつわる人生の諸戦略—」の 2 つについては、講演録を収録しました。

スワンウィック博士らは、ガーナにおける聴覚障害児とその養育者の早期教育について調査する、イギリスとガーナの共同プロジェクトを推進されています。ご講演では、ガーナにおけるろう児の早期ケアと教育の現状と課題、そしてそれを支えるための具体的な取り組みについて詳しくご紹介いただきました。森氏は、南アジア、アフリカ、中東などの地域における障害者の生活と貧困の問題といった開発研究にも精力的に取り組んでこられた一方で、日本手話学会の会長や国際的学会誌の編集委員を長年務められるなど手話の言語学の領域でも活躍されています。ご講演では、ご自身のおいたりや職業生活を踏まえて、ろう者のセルフ・アドボカシーと言語戦略とをいかに結びつけるかをお話いただきました。

また、本学会では、2023 年度大会企画に際して 2022 年秋に「バイリンガルろう教育」をテーマとした読書会を開催しました。バイリンガルろう教育は、人工内耳の発達などによりインクルーシブ教育の流れが強まり、世界中で歴史的な転換期に差しかかりつつありますが、そのような、ろう児を取り巻く技術や社会情勢の変化を概観し、ろう児の発達と手話のあり方を考える機会とすることを目的とした読書会でした。今号には、読書会で取り上げた 10 本の文献の紹介も 1 本の論文としてまとめて収録しておりますので、多くの方にご活用いただければと思います。

さらに、年次大会では、バイリンガルろう教育は、ろう者のみでなく、マイノリティに共通する課題を有しており、そのひとつに「言語とアイデンティティ」の関係があるという考えから「言語とアイデンティティ—当事者の視点から—」というパネルディスカッションを企画しました。当日は、北原モコットウナシ氏にはアイヌ、富田望氏にはろう、オーリ・リチャ氏には差異の政治学という観点から、言語とアイデンティティの関係を論じていただき、「公正な言語教育を求めて」という大会企画にふさわしいパネルディスカッションとなりました。この議論の内容は、パネラー全員に発表の概要をご執筆いただき、司会の福島青史氏に全体をまとめていただいた 1 本の論文として今号に収録しています。読者の皆様が言語教育が公正に関わる可能性について考える一助となれば幸いです。

一般投稿論文からは、研究論文を 2 本、研究ノートを 3 本採択し、掲載しています。

まず、研究論文には、中村香苗氏による「在日台湾人母の子育てのナラティブ分析—台湾留学への

戦略的介入」と、王桃氏による「日中バイリンガル環境で育つ幼児の二言語混用について—トランスランゲージングの視点からの考察—」を掲載しました。中村論文は、幼少期に台湾の言葉や文化を教育しなかったものの子どもを台湾の大学に留学させるという希望を叶えた2人の在日台湾人母に焦点を当て、2人の子育て戦略をナラティブ分析の手法を用いて探ったものです。また、王論文は、中国語母語話者の両親のもとに日本で生まれ育った幼児を対象とし、3歳0か月から3歳11か月に至る時期の母親との会話場面を録画・観察した上で、対象児の発話文を分析し、二言語混用についてトランスランゲージングの視点から考察しています。

研究ノートには、瀬尾悠希子氏による「転換期の補習授業校で働く教師の傷つきやすさの変容—語りあいの場に参加した教師の語りから—」、エルデネー・ビンデリア氏による「ピア・レスポンス活動の相互行為におけるトランス・ランゲージングの実践—モンゴル人学習者の母語と日本語の使用実態を中心に—」、中家晶瑛氏による「言語継承における継承語不安と継承語イデオロギー—日本社会で継承語を継承しなかったニューカマー2世の語りから—」を掲載しています。

瀬尾論文は、在籍する児童生徒が多様化して転換期を迎えている補習授業校で働く教師との「語りあいの場」と個別インタビューで得られたデータのうち1名を対象として、転換期の補習授業校で働く教師の傷つきやすさに焦点を当て、物語モードのアプローチにより探ったものです。エルデネー論文は、モンゴル人学習者2名を対象として、母語と日本語の自由な言語使用を認めたピア・レスポンス活動を実施し、ピア・レスポンス活動におけるモンゴル語と日本語の使用をトランス・ランゲージングの観点から分析しています。そして、中家論文は、日本社会で親から継承語を継承しなかったニューカマー2世1名にインタビューを実施し、HLA（継承語不安）というネガティブな側面にあえて着目して、ニューカマー2世が言語継承をしなかった様相を、彼らの視点からテーマ分析により探索的に明らかにしたものです。

これらの論文は、本学会の対象領域の様々な側面を取り上げ、これまでの母語・継承語・バイリンガル教育研究の基盤の上にさらに研究を進めた論考となっていますが、次号にも多くの方々が論文を投稿して下さることを願っております。紀要第21号投稿規定も本誌の巻末に掲載しておりますので、ご参照ください。

最後になりましたが、紀要第20号の発刊に際し、ご投稿くださった方、査読、編集に多大な労力をささげてくださった方、その他関係者の皆様に心から感謝申し上げます。

母語・継承語・バイリンガル教育（MHB）学会会長

小澤 伊久美

2024年5月